



能古博物館だより



鎮魂 東日本大震災

世界中が注目する 日本人の底力

理事長兼館長 原 寛

伝えてくれました。

同様の祈りが地球上の処々かしこで行なわれ、各国の緊急援助隊が続々と日本にやってきました。日本は孤立してはいないとつくづく思います。平和憲法を守り、国連には世界で2位の拠出金を負担し、ソニーやトヨタが世界ブランドになり、アニメで独自の文化を発信する日本人に、世界は信頼と同情の温かいまなざしを向けているのです。

世界の人々はいま日本人に注目しています。あの敗戦のどん底からはいあがった日本人の底力をもう一度みてみたいと。66年前の国情を想起すれば、出来ないことはありません。我々は世代を超えてこれからの日本のあり様を考え、新たな日本モデルを世界に示したいものです。

「海の博物館」のシンボル「国際信号旗」を二回り大きくしました。

写真の左端はおなじみのZ(ゼット)旗。1905(明治38)年5月27日、ロシアのバルチック艦隊に勝利した日本海軍連合艦隊の旗艦「三笠」のマスト高く掲げられました。

『皇国の興廃この一戦にあり各員一層奮励努力せよ』

あれから106年目、いままた我々は「興廃」の岐路にあります。

× 気持ちの良い季節。ご来館をお待ちします。



原 寛

婦がメールで

シドニーのシティとよばれる都心の一角に州立美術館があります。この5年間に2度ほど訪ねましたが、朝から観光客や地元の小中学生の見学で賑わっていました。1階中央付近の日本部門は浮世絵のコレクションが充実し、茶室までがしつらえてあります。

その日は日本から輪島塗りの職人が10人ほど来て、輪島塗りの講義と実演を行う予定でした。しかし講義に先立ち、主催者の美術館員は次のように切り出しました。

「今日ここに来られている輪島塗りの職人のみなさんには、幸いなことにご家族・ご親戚などが直接被害に遭われた方はいらっしゃいません。けれども、今回の大地震と津波で被害に遭われた日本人のみなさんのご冥福をお祈りし、また今後1日でも早く日本の国が被害から立ち直ることを祈って、1分間の黙祷を捧げましょう。」

参加者は頭(こうべ)を垂れ、静かに祈ったそうです。

もうおわかりでしょう。東日本大震災が発生して3日目の3月13日、日本から数千キロ離れた南半球で異例の黙祷が行なわれていたのです。ボランティアの通訳として立ち会っていた現地の日本人主婦がメールで

能古博物館所蔵

「石橋家文書」の

解説・解析作業(その2)

友の会会員 石橋善弘

(参照資料：仮番号0007、0008、0009、010、011、015、016、017、056、平成18-74、平成18-124、平成19-18)

扶持(ふち)遣わし候

「能古だより」第61号(平成22年10月)において、姪浜且過町の石橋家は江戸末期には20人扶持を与えられていた(慶応分限帳による)という事を述べたが、実際、石橋家文書の中には「扶持」に関する目録・覚書等が10数点みられる。あまたの町方郡方で扶持をうけた者は極々少数のはずであるから、これだけの数の資料がまとまって出てきたこと自体めずらしいことかもしれないが、それ以上に、それらを並べてみることににより、「扶持」をめぐるいろいろのことが浮かび上がってきて、興味を引かれるものがある。

墨で描いた大きな花押

仮番号0007は、文政3(1820)年辰2月に筑紫四郎兵衛道門が、紙屋善三郎に1人扶持を与えた目録である。「為扶助一人扶持宛行(あてごう)之者也」。武士階級はそれぞれに花押をもっていたようであるが、墨で描いた大きな花押が面白い(写真1)。明記されていないが、紙屋善三郎という個人に与えたものであるから、1代1人扶持である。なお、紙屋は石橋家の屋号で、ここでいう紙屋善三郎は石橋善三郎房種(天保10(1839)年8月12日・77歳で没)のことである。



与えた者が誰かはわからない。

仮番号0009は、櫛橋辰五郎が文政7(1824)年申11月19日に石橋善三郎房種に1人扶持を与えたものである(写真2)。なお、櫛橋家は江戸時代、藩から2千石を得ていたようである。

仮番号010は、文政8(1825)年酉10月24日に石橋善三郎房種にあてた書付であるが、「去る年末仕組みが変わつた際(注1)相談したところ、出銀してくれたので安心して、その後もいろいろ相談した筋について心よく(金を)出してくれて」満悦“である。依つて、これまで与えていた扶持に1人扶持を追加し、都合2人扶持を遣わす、今後もよろしく頼む」とある。残念ながら、この書付の差出人は不明であるが、

仮番号0008は文政5(1822)年12月に石橋善三郎房種が1人扶持を受けたものであるが、文書にいわく、「当春以来いろいろお世話になったので1代1人扶持を与える、今後もよろしく頼む(已後尚又申合用達有之候様存候之事)」。署名がないので、扶持を



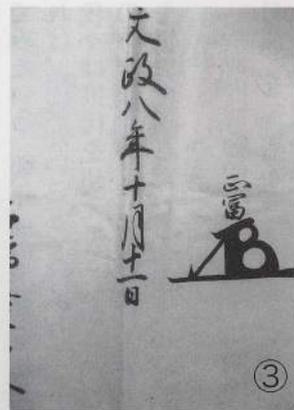
文政8年以前にすでに1人扶持を与えていた者であることは明らかである。これからもよろしく

仮番号011は大名町の田代正富が、文政8(1825)年10月11日に永代3人扶持を与えたものである。宛先を明記したものは残っていないが、仮番号010のものより13日前の記録であり、扶持を受けたのは石橋善三郎房種であることはほぼ自明である(写真3)。

仮番号016は、天保5(1834)年9月5日に(竹田)助之丞が、「これまで手元財用繰りが難渋していた際、深切(親切)に世話してくれ、また旅勤めも無事済んだ、メデタイ、メデタイ(祝着候)。依つて、2人扶持を与える。これからもよろしく」と述べたもので、花押はない。宛先は、石橋善三郎房種及びその養子伊三郎(下野間街石橋伊右衛門第3子、後の石橋善三郎直実、1856(嘉永7)年63才で没)の連名になっている。このような文書で宛名が連名になっているのが珍しいことかどうかかわからないが、2代にわたつて2人扶持とも解釈可能であり、まぎらわしいことに違いない。

なお、扶持を与えた竹田助之丞は貝原益軒の弟子で、黒田家譜の作成にあたり、後の天保6(1835)年大目付へ転役しているようである。また藩校修猷館の塾頭を務めたことでも知られている。

ところで、上記の「旅勤め」というのは、参勤交代による江戸詰めか長崎勤番であろうが、この年の3月

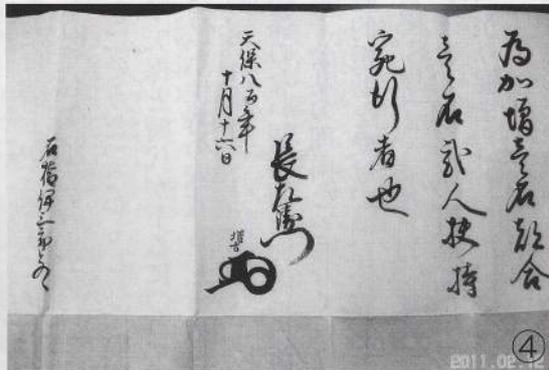


には久野外記(後出)が江戸表より戻って来たという記録があるので(加瀬家文書)、助之丞の方は長崎勤番かも知れない。

仮番号/平成18-174によると、この天保5(1834)年には石橋善三郎(房種)が永代50人扶持を受けている。これについては、あとでコメントする。

仮番号015は、天保7(1836)年申4月11日に久野外記が1人扶持を与えたもので、受け手は石橋善三郎房種である。

仮番号017は、天保8(1837)年内10月16日に町奉行の(牧)長左衛門増吉が石橋伊三郎(前出)に1石加増して、都合1石2人扶持を与えたときの書付である(写真4)。天保8年といえ、石橋善三郎房種の存命中であるが、すでに隠居気味か何かで、跡取りの伊三郎が代わって扶持をうけたのかもしれない。



絹羽織着用を許す

仮番号056は、某年10月10日に某者から石橋善三郎(直実)が永代3人扶持を受けたときの「覚」であるが、この覚書から当時の様子がよくわかるので全文を記しておこう。

「覚

石橋善三郎江

其方事年来銀主相頼み置候処常々無間欠出性は

有致大慶事に候 就中誠に数度之旅行き打続ぎ別而物入多く其上非常之出財をも間々是有 近年甚六ヶ敷世帯探り候処無差支致調達為宜親切に世話是有候段甚以致感心事に候 依是為扶助永代三人扶持差遣事
十月十二日

仮番号/平成19-18の資料は、安政4(1857)年3月26日に設けた目録入れの中にあつたもので、「金二千両寸志抛金分永代拾人扶持下され分...石橋善五郎代」と記されている。ここでいう石橋善五郎は後の石橋善左衛門房重(明治6(1873)年8月11日56歳で没)である。

前述の資料(仮番号/平成18-174)によると、天保5(1834)年12月に早良郡姪浜村大庄屋格石橋善三郎(房種)あてに、「銀五百貫目の用立てに対し、永代五拾人扶持かつ二代大庄屋上に申付け、絹羽織着用を許す、引続き倅一代大庄屋格に申付ける」との覚書きが残っていたのを、23年後の安政3(1857)年2月に石橋善三郎の孫である善五郎が何らかの理由により、居村役場(早良怡土志摩郡役所)に注2に差出した。この文書はその時の控えである。内容をみると、扶持以外にも身分に係わる記述があり、案外高位の者が出した「覚」かもしれない。いずれにしても、そのような「覚」を役所に差出すときにはそれなりの理由があるはずで、その理由が知りたいものである。

1人扶持は1日玄米5合

さて、そもそも扶持というのは、主人から家来に下付した給与米のことであり、1人扶持は、男子1人分1日玄米5合を基準にして、1ヶ月(30日)に1斗5升を与えるというものである。この計算でいくと、石橋家が得ていたとされる20人扶持は、30日につき

3石、1年を360日すると36石を与えることに相当する。また、仮番号017の文書にある1石加増は約0.6人扶持加増に相当しよう。注3

ところで、1人扶持(1日玄米5合)は現代の価格ではいくらなるのであろうか? 5合が約750gに相当すること、1年を360日とし、平成22年末の時点で精米10kg約4千円(玄米はもっと安いだろう)等を考えると、単純計算で年10万8千円に相当する。これでは、とても1人の者が生きてはいけない。

2千両は2億円

事のついでに、抛出された2千両や銀500貫が現代ではどのくらいの価値になるのか見てみよう。なかなか難しい問題であるが、1両が10万円に相当すると仮定すると(6万円から30万円くらいの推定もある)、2千両は2億円という莫大な金額にあたる。仮番号/平成19-18の資料では、それで10人扶持であるから、2千万円抛出して1人扶持(約10万円)をいただけたというわけである。

銀500貫の現代価値の推定ははるかにむずかしい。平成22年末の銀価格(1g約80円)をそのまま当てはめると約1億5千万円になるが、銀の純度の問題(現代価格を下げる)、当時の人夫の労賃などを勘案すると、80円の3倍から20倍程度に見積もるのが順当と思われる、仮に10倍とすると15億円になる。仮番号/平成18-174の資料では、これで50人扶持であるから、1人扶持は3千万円相当となる。そのほかに、絹着用の資格などのオマケがついているので、先の2千万円とくらべても、そう不思議な金額ではない。ところで、2億円といふ15億円といふ、莫大な金額である。このような莫大な金が、特別なルールもなく、個人と個人の間(個人と藩主の間もあろう)で頻繁

に動いているような、あるいは動かなければ維持できないような社会は歪みの極めて大きい社会であり、安定的に持続しうる筈もなからう。

扶持の権威もどこへやら

このような推定からわかるように、扶持にかかわる差引き計算の極端なアンバランス(約10万円のもの数千万円に相当)があるからこそ、富裕層に与えられた扶持は、公共への貢献があった者等に対して、ご褒美として藩主または藩士から公式に与えられた名譽以外のなものでもないはずである。ところが、初めのうちは確かにそうだったかもしれないが、江戸期も文化・文政・天保と時代が下るにつれて事情が変わってきたようで、扶持の権威もどこへやら、やれ旅行費用が必要、やれ所帯ぐりが困難などの理由、即ち公共とは関係のない個人的な理由で(藩の命令による旅行は若干公共の理由といえなくもないが)、富裕層から財政的援助を受けては、扶持を乱発しているように見える。しかも、末尾には「今後ともよろしく」とあることは、覚書きの書式・慣習以上に、スポンサーをしっかりと捉まえておきたいとの気持ちがかがえる。

所詮は私文書

それはそれとして、ここで示した資料のうち、花押があるものには少しは公的な意味があるのかもしれないが、役職に付随した印ではないので、所詮私文書の域を出ないだろう。ある地方史家によると、年号が明記されていないことや、藩士の場合に署名がないことは意識的にそうした模様で、扶持の権威が下がったことを物語る以外のなものでもない。この「公式度」に関しては、対応する資料が藩の方に残っているかどうか判断の決め手になるだろうが、時代背

景を考えると、筆者は「そのようなものはない」方に賭ける。勿論、江戸後期にあつて、町方郡方への扶持はもともとその程度のものだと思つていたに違いない富裕層にとっては、記録があろうとなかろうと、「公」とか「名譽」とかはどうでもよかつたのかも知れない。与えられた扶持が何かの折に、例えば家格が物を言うような場合に役立つことはあるとしても。

藩士の困窮ぶり

いつのころからか、「旦那様、また〇〇様から云うてきちゃーですバツテン、どげんしときままつしょうか」、「この前程度でよからうモン」、あるいは「扶持バやるて言ひござあですバツテン、なあもなかりよかですタイ」、「いや、役に立つこともありませんよケン、ちゃんと貰うときなつせ」……などという会話があつたかどうか。とにかく藩士の困窮ぶりが察せられることではある。

やぶれかぶれの空手形

ところが、そう茶化してばかりではいけないことを思わせる資料も残っている。時代は下るが、仮番号／平成18-124の資料は目録入れにあつたもので、いわく「明治3年庚午閏十月十七日谷村於司民曹」注4「父善五郎江被下遣候永代式人扶持跡目相続信太郎江被仰付候御目録」。明治3(1970)年といえ、幕藩体制は一応の終りをつけていて、廃藩置県「明治4(1871)年7月14日」の1年前にあたるが、事そこに至つてもなお、「永代」の扶持をやりとりし、さらに付け替えまで行つてゐる。

ここで筆者の疑問は、扶持を与える方、受ける方の双方ともいずれば扶持が空手形になることをある程度予想していたのかどうか、あるいは風の吹きまわしによつては旧体制にもどることもあり得て、必

ずしも空手形にはならないと思つていたかどうかということがある。一体どのような気持ちで扶持のやり取りをしたのだろうか? この時期に「永代」などというのはいずれもやぶれかぶれだったのではないだろうか? しかし、記録が残つていないということは、少なくとも受けた方は記録を残すことに意味を感じ、決してないがしろに扱つてはいないということであろう。なお、これを書いたのは善五郎(前出、善左衛門房重)の子で、善二郎襲名前の名が信太郎であつた石橋善三郎直重「明治23(1890)年6月9日48歳で没、筆者の曾祖父」である。

「御上より」の解釈

ところで、これ迄見てきたように、石橋家文書には藩主自身から扶持を受けたことが明確にわかるような記録は残つてはいない(仮番号／平成18-174の文書はそうかもしれない)。勿論、藩主自身が町方に扶持を遣わしても不思議ではないし、むしろ当然のことである。たとえば、偶々手元にあるので引用するが、江戸中期から姪浜石橋家「注5」と親戚関係にあり「能古博物館だより」第47号(平成17年)「第55号(平成19年)参照」、福岡湊町で栄えた商家加瀬家の記録(福岡市博物館所蔵)の中にも、そのような記述が見つかる。天保5(1834)年甲午7月末に、当時の当主加瀬茂作元春がつくつた覚書きに、

今程手元頂戴仕居申候御扶持左之通

御上より

一人扶持

新右衛門様より

(中略)

以上十三人扶持、凡六十五俵也

とあり、藩主から扶持を頂戴したらしい。これについては、「御上より」とあるからといって「藩主から」と

解釈するのは、短絡過ぎるという意見もあるということをおこす。

石橋家文書からもわかることであるが、多数の藩士が折に触れて、扶持を、それも1代であったり永代であったり、1人扶持であったり2人扶持であったりとバラバラに与えているので、受ける方もその管理が大変である。加瀬茂作さんのように、時々書き出してみる必要があったらしい。今風にいえば、持っている扶持の管理は自己責任ということだろうか？

「慶応分限帳」に疑問

さて、最後に蛇足をひとつ。冒頭、「慶応分限帳」により、姪浜且過町石橋家は20人扶持を受けていたと書いたが、天保5(1834)年に永代50人扶持を受けているのであるから、この記述は矛盾している。同様に、加瀬家は「慶応分限帳」では1人扶持になっているが、天保11(1840)年に書き出された「郡町之者由来書」注6によくと2人扶持になっているし、見てきた通り、加瀬茂作の覚書きによると13人扶持となっていて、本当のところはわからない。つまり、この道の全くの素人ではあるが筆者が言いたいのは、「慶応分限帳」の信頼性には一部疑問があり、それを利用する際には注意を要するということである。これは、「慶応分限帳」に限らず一般に「分限帳」と称するものの成り立ちからみてやむを得ないことであろう。専門家・玄人にとっては、すでに常識かもしれないが……。



本稿を書くにあたっては、石橋家文書研究会メンバー(早船正夫、伊佐英喜、原順子、原田一男、瀬戸美都子の諸氏)にお世話になった。感謝の意を表する。

注1 〓ここでいう「仕組み」は、単に制度・組織といった意味で使われているようであるが、藩の産業振興策や財政策のことである。福岡藩では早い時期から、「鶏卵仕組み」寛保3(1743)年、「櫛仕組み」寛政8(1796)年など多々あるので、稿を改めたい。

注2 〓早良郡姪浜村は早良怡志摩郡役所の管轄下にあった。なお、早良怡志摩郡役所は現在の福岡市早良区西新1丁目あたりにあったようである。

注3 〓1年を何日とするかは、藩によって若干のバリエーションがあるようである。また、1人扶持は1・77石相当とされているようである。

注4 〓この時代、司民曹(長)という江戸時代の庄屋に相当するらしい役目が公の制度としてあったのかどうかよくわからない。ご存知の方々に教えを乞いたい。

注5 〓ここでいう石橋家は、「石橋家文書」が残っていた姪浜且過町の石橋家とは異なる。

注6 〓福岡地方史研究会編「福岡藩分限帳集成」(海鳥社、1999年)665頁。



【筆者紹介】いしばしよしひろ 昭和10年(1935)福岡市姪浜町に生まれる。福岡師範学校(現福岡教育大学)付属小・中学校、修猷館高校、東大院卒。名古屋大学名誉教授。理学博士。

☆「海の部屋」と「日野原ホール」のご案内☆



季節ごとの句会や研修会、サークルの発表会や反省会など、色んな集まりにぴったりです。博多湾の「へそ」と言われる緑豊かな能古島で、のびのびと心ゆくまで、しかも手軽に集まっていただけよう、ふたつの広い部屋をリーズナブルな料金で用意いたしました。お気軽にご相談ください。

■設備の内容

海の部屋 〓館内で一番眺めの良い部屋 〓写真右 〓目の前の博多湾から対岸のビル群まで広く見渡せます。ジオラマケースを兼ねた特注の大型テーブルを囲んで10人座れます。窓際の椅子を使えば20人位は可能。隣の喫茶コーナーに隣金方式の飲み物を用意しています。

日野原ホール 〓館内で一番広い部屋。新老人の会の日野原重明会長(100歳)が、島内の子どもたちに「命の授業」写真左 〓を行ったのを記念して命名しました。会議用テーブルと折りたたみ椅子、マイクを使って約50〜60人程度の集会ができます。

■ご利用料金

大人ひとり4000円の入館料プラス1000円で、どちらかの部屋を4時間まで利用できます。

(最低基本料金：2時間 使用で4,000円)

・料金・開催曜日、人数、時間、飲み物などのご相談をお受けします。

(電話 092-8833-2887) (FAX 092-8833-2881)



「海外引揚げ」の資料を

集めています

能古博物館は、1945（昭和20）年の敗戦以降、海外から引揚げてきた一般、復員軍人約660万人の方々の思い出の品々（記録集、著書などを含む）の収集を始めました。20世紀から21世紀へと時代は大きく変わり体験者は減少の一途です。ご本人でなくてもご家族で管理していらつしやる品など、手放してよいものがあれば左記にご報ください。寄贈、寄託のいずれでもかまいません。ご相談させていただきます。

- ▽住所 〓 〒819-0012
福岡市西区能古5221-2
- ▽電話 〓 092-1883-2887
- ▽FAX 〓 092-1883-2881
- ▽E-MAIL info@nokonoshima-museum.or.jp

後世に残したい引き揚げの史実

博物館役員 西牟田 耕治
（福岡市東区 73）
て舷側に寄つてきた。
7日付の朝日歌壇を感慨深く読んだ。「引き揚げは遠き日となり娘らに『帰国子女』などたわむれ呼ばる」（郡山市・志村幸子）
1946年9月、私は家族と共に旧満州(中国東北地方)から貨物船で福岡市の博多港に引き揚げた。検疫のため博多湾内の能古島西方沖に仮泊すると、サヨリが群れをなし

きつかけは新聞「声欄」への投書

海外からの引揚げ体験が風化するのを憂い新聞に投書(朝日新聞2月19日付き)したところ、北九州市の女性から懇切なお手紙を頂き、そのうえ1冊の本(写真下)が送られてきた。大変貴重な資料なので別館2階の常設展示「海外引揚げの記憶」の一角に展示するよう準備を進めている。

これをきっかけに館だよりの読者はじめ全国各地の皆様へ引揚げ資料の提供を呼びかけることにした。何をいまさら、というご批判はあろうかと思う。しかしこれが最後のチャンスかも知れない。

(能古博物館・西牟田耕治)

☆お手紙の要旨☆

朝日新聞の「声」欄を拝見し、もし何かのお役に立ったらと思いいこの本を送ります。

立つさわやかな民営施設である。08年、開館20周年記念の特別企画展「能古島発「博多湾物語」〜蒙古襲来からサザエさんまで」を開催した。入館者に投票してもらったところ、「興味深かったもの」のトップに「海外引き揚げの記憶」がダントツで選ばれた。予想しなかった昭和史の1位。大いに勇気づけられ、常設展示に移した。

私も年をとり身辺整理をしておりましたら、本棚にこの本を見つけ、再読して町内の古紙回収に出そうかと思いましたが、読み返してまた感動しまして、どなたか満州から引揚げられた方があればなつかしく思われるのではなにかと思っております。

終戦後66年になろうとしています。

いま、忘れ去ってはならないことだとしみじみ思います。
(北九州市八幡東区 A・Oさん)



引揚げ体験記「請再来」=山口敏子著(昭和47年初版、同54年3版発行)



=引揚げ時に使用した思い出の品々=写真福岡市保健福祉局提供

博多港引揚げ資料の収集

過去に「引き揚げ港・博多を考える集い」(考える集い)が引揚げ記念館の建設を目指して収集した資料多数が、建設は実現しないまま現在、福岡市総合図書館に寄贈され、3年に1度公開されている。

寄贈品は海外での暮らしぶりをしのげる防寒帽、卒業証書、紙幣、絵葉書類。引揚げ用のリュックサック、なべ、やかん、水筒、肩紐付き手縫いバッグ、予防接種証明書、引揚者腕章、引揚げ証明書など。引揚げの動きを伝える新聞の切り抜き、写真もある。

能古博物館は現在、「考える集い」の協力で複写した写真資料と市側でまとめたデータ、「中国からの海外引揚げ漫画家の会」(森田拳次代表幹事)提供の作品9点などを別館2階に常設展示している。

能古博物館協賛会・友の会

平成22年度の継続・新規会員(同23年3月現在)

法人協賛会員

- 医療法人 笠松会有吉病院
- 税理士法人エム・エイ・シー
- ギヤラリー倉
- 医療法人社団江頭会 さくら病院
- 医療法人社団廣徳会 岡部病院
- 医療法人社団特別養護老人ホームなごみの里
- 多々良福祉会 たいようの里
- (株)CDS
- 福岡メディアカルリース
- 医療法人恵光会 原病院
- (株)サンコー
- 浄満寺
- (株)メディアカルアシスト青葉
- (医)大乗会 福岡リハビリテーションシオン病院
- (株)彩苑
- (株)豊友技建工業
- (有)タカテクノサービス
- エムサービス(株) HSS九州事業部
- (有)トータルサポート・コーポレーション
- (株)ホームケアサービス
- 福岡住宅流通サービス(有)
- 西日本シティ銀行土井支店
- センタービジネス

個人協賛会員

- 明石 散人
- 足立 晴道
- 安藤 文英
- 石野 智恵子
- 出口 親
- 上崎 典雄
- 上野 道雄
- 岡部 キミヨ
- 亀井 准輔
- 久保 千春
- 熊谷 豪三

- 毛戸 彰
- 朔望
- 朔元 則
- 昇地 三郎
- 仁保 喜之
- 関 敏巳
- 添島 律子
- 平 祐二
- 多々羅 節子
- 津田 泰夫
- 津村 建次
- 寺坂 禮治
- 寺田 隆
- 戸井 雅貴
- 永野 豊
- 原 敬二郎
- 原 寛
- 原 真澄
- 原 礼子
- 藤井 鉄夫
- 福山 智美
- 増田 康治
- 翠川 文子
- 本松 利治
- 八木 博司

友の会会員

- 明石 久美子
- 明石 幸
- 赤松 慶礼
- 秋山 雄治
- 新川 時弘
- 荒巻 久義
- 池上 和子
- 池田 修三
- 池田 淳治
- 池田 昌朗
- 池田 幾生
- 石井 福美
- 石井 美智子
- 石川 経子
- 石橋 清助
- 石橋 哲治
- 石橋 延枝
- 石橋 善弘
- 一鬼 秀之助
- 一坊 寺将
- 市丸 喜一郎
- 出光 豊
- 出光 芳秀
- 井上 昭義
- 今永 一成
- 今村 さち
- 石清水 由紀子
- 岩本 博秀
- 上園 幸則
- 上田 恒久
- 上田 博
- 上原 孝正
- 上村 八郎
- 魚住 夫佐子
- 牛島 茂子
- 内山 弘美
- 宇都宮 邦子
- 内海 眞記子
- 梅埜 國夫
- 浦田 裕
- 江口 正一
- 江崎 小二郎
- 江原 幸雄
- 大石 恭仁子
- 大木 茂
- 大島 照子
- 大智 玲子
- 大庭 浩司
- 大庭 静枝
- 岡部 九州生
- 岡村 奈央
- 岡本 顕實
- 小川 誠
- 小川 道博
- 小原 美枝子
- 小山田 公子
- 柏木 和子
- 香月 悦子
- 金子 柳水
- 嘉村 正子
- 川田 啓治
- 河野 道博
- 川辺 真二
- 河村 敬一
- 木血 敦代
- 岸和 枝
- 岸 洋子
- 岸川 伸子
- 吉瀬 宗雄
- 城戸 兼子
- 木戸 龍一
- 清田 美弥子
- 久世 玲子
- 國武 英子
- 久芳 正隆
- 黒田 明子
- 甲本 達也
- 古賀 勝子
- 小坂 セツ
- 小谷 修一
- 児玉 玲子
- 小堀 瑠伊子
- 小宮 作
- 小柳 定子
- 小山 京子
- 小山 富夫
- 小山 やすよ
- 境トモ工
- 神和美
- 坂口 征雄
- 坂梨 喬
- 櫻木 榮紀
- 佐藤 郁男
- 執行 敏彦
- 篠原 栄太郎
- 篠原 ヨシ子
- 柴戸 次雄
- 柴本 隼太
- 島塚 祐弘
- 白橋 裕美
- 進藤 邦彦
- 進藤 康子
- 杉謙一
- 杉原 正毅
- 杉山 謙
- 岡部 祐子
- 住本 直之
- 住本 霞
- 関賢司
- 瀬戸 美都子
- 瀬野 雄市
- 芹野 二美
- 高木 いづみ
- 高崎 幸江
- 高嶋 俊光
- 高嶋 季雄
- 高根 襄
- 高松 まり
- 武田 洋子
- 田坂 大蔵
- 田里 朝男
- 田代 朝子
- 立石 京
- 谷口 治達
- 鶴田 スミ子
- 徳永 武生・和子
- 泊 秀治
- 富永 靖雄
- 豊田 文彦
- 豊田 富美子
- 長尾 勲
- 永岡 喜代太
- 中島 謙吾
- 中島 怜子
- 中国 克郎
- 中野 晶子
- 中村 和
- 長野 静香
- 鍋島 典子
- 西方 俊司
- 西田 靖司
- 西田 靖子
- 西牟田 奈々
- 西山 紀子
- 野崎 逸郎
- 長谷川 寿美子
- 播口 弘子
- 波多野 直之
- 服部 たか子
- 花田 ひろ子
- 林 十九楼
- 林 由紀子
- 原和美
- 原順子
- 住本 霞
- 原靖子
- 原 祐一
- 原口 和子
- 原田 雄平
- 東原 慶治
- 日野 原重明
- 姫野 弘子
- 平川 好美
- 平川 良輔
- 廣田 恵美子
- 福井 和子
- 福田 殖
- 福富 節子
- 福元 征四郎
- 藤瀬 三枝子
- 藤村 信義
- 藤田 昌弘
- 古川 映子
- 豊丹 生昌義
- 星川 満智
- 堀川 大助
- 眞田 敏也子
- 眞柴 和子
- 舛永 登世子
- 真角 磨鬼枝
- 松井 俊規
- 松尾 純子
- 松岡 智恵子
- 松熊 友彦
- 的野 恭一
- 松本 美津子
- 丸山 敏子
- 三浦 佑之
- 見沢 照栄
- 水田 和夫
- 三角 幸子
- 溝口 進
- 三戸 京子
- 三苦 進
- 南アサノ
- 三野原 勝子
- 簀原 聡
- 三宅 碧子
- 宮崎 集
- 宮崎 美津子
- 村上 牧
- 杜あとも
- 森 悦次郎
- 森 純子
- 森 正敏
- 森下 智子
- 森下 昭子
- 森本 繁
- 安恒 忠男
- 安保 博史
- 安松 淳祐
- 矢野 鈴子
- 八尋 祥文
- 山口 勝久
- 山田 博子
- 山本 留美
- 吉開 史朗
- 吉倉 慎子
- 吉田 登美代
- 吉松 須和子
- 吉安 蓉子
- 米倉 満子
- 脇山 玉枝
- 和田 宏子

注：敬称略五十音順
・数字は会員歴(年数)

協賛会・友の会 入会のご案内

- (一) 協賛会会費
個人 10万円
(何口でも可)
- 法人 10万円
(何口でも可)
- (二) 友の会会費
1000円
(何口でも可)
- ※会費の納入方法
郵便振替
0173096070
財団法人能古博物館
- (1) 振込み料は当館にて負担させて頂きます。
- (2) 受付次第、会員証とコーヒーチケットをお送り致します。
- (3) 会費有効期限は1年に致します。
- (4) 入館時に会員証(同伴1名まで有効)を受け付けに提示下さい。ご入館は随意で回数制限はなく無料です。
- (5) コーヒーチケットで挽きたての香り豊かなコーヒートをサービス致します。
- (6) 「能古博物館だより」を年数回お送り致します。また、会員の皆様は御寄稿・ご意見は同誌に掲載致します。但し諸事情で掲載を見送る場合もございます。予めご了承下さい。
- (7) 館が企画する催物のご案内と参加費の割引を致します。



アクセス

西鉄バス

- ・JR博多駅 博多口正面Aのりば
300、301、302番 能古渡船場行:約50分
- ・天神 三越前1Aのりば
300、301、302番 能古渡船場行:約30分

市営地下鉄:「姪浜駅」下車 乗り継ぎ

- ・西鉄バス姪浜駅 南口
98番 能古渡船場行:約12分
- ・タクシー:約 8分

市営渡船(フェリー)

- ・姪浜-能古島間:約10分

能古島渡船場より博物館まで

- ・徒歩:約5分~10分
- ・アイランドパーク行き西鉄バス停
「能古学校前」下車、徒歩約3分(下り坂)

問合せ

姪浜旅客待合所 TEL 092-881-8709
能古旅客待合所 TEL 092-881-0900

開館日/毎週 金曜・土曜・日曜と祝日

開館時間/10:00~17:00(入館16:30まで)

(注) 冬季(12月~1月)は、年末年始及び展示物入れ替えなどで長期休館を原則としています。御用の場合は事前にお問い合わせ願います。

入館料/大人400円・高校生以下無料
※団体の場合は休館日にかかわらずご相談ください

能古・姪浜航路時刻表

	姪の浜 発	能古 発
5	15	00
6	30	15 45
7	00 30	15 45
8	00 30	15
9	15	00
10	15	00
11	15	00
12	15	00
13	15	00
14	15	00
15	15	00
16	15	00
17	15 45	00 30
18	15 45	00 30
19	45	30
20	30	15 45
21	00	45
22	00	45
23	00	00

◎印は日祝日運休 2010年10月現在

渡船場からアイランドパークへの西鉄バス時刻表(平成23年3月19日現在)

渡船場前発(能古学校前まで約2分)

時	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
平日	12 55	45	30	30	55	35	35	35	45		
土曜日	12 55	45	30	30	55	35	35	35	45		
日・祝日	12 55	30 45	30 45	30 45	30 55	30 55	30 45	30 45	30 45	45	30

アイランドパーク発(能古学校前まで約8分)

時	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
平日	30	20	3	13	28	18	18	18	18	28	
土曜日	30	20	3	13	28	18	18	18	18	28	
日・祝日	30	20	3 18	3 18	13 28	13 28	13 28	3 18	3 18	3 18	13 48

※ 繁忙期はバス、渡船とも臨時便が運行されます。



財団法人 亀陽文庫

能古博物館

〒819-0012 福岡市西区能古522-2 TEL 092-883-2887 FAX 092-883-2881
http://nokonoshima-museum.or.jp E-mail info@nokonoshima-museum.or.jp